

《優秀賞》

「二本松の宝、戒石銘に触れて」

二本松第三中学校 一年 渡邊 奏志

国会議員の秘書や地方公共団体の長らによるお金をめぐる不正事件がテレビをさわがせている。裏金事件や目的を大きく外した不適切な会合などの不祥事が後を絶たないが、その費用はすべて日本国民の税金が使われている。この問題に喝を入れるべく、二本松商工会議所が動いた。江戸時代中期、二本松藩が藩士の戒めとして刻ませた大岩「戒石銘」を写した拓本と石盤を岸田文雄首相に送ったのだ。岸田首相は「しっかりと襟を正して、原点に返って仕事をすることを戒めとする」と語ったという。

戒石銘に刻まれた四句十六文字に込められた武士としての誠実さを求める心構えが、現在の公務員に原点回帰を促すのは何故だろうか。戒石銘の現代の解釈では「お前の俸給は、民があぶらして働いたたまものより得ている。お前は民に感謝し、いたわらなければならない。この気持ちを忘れて弱い民達を虐げたりすると、きっと天罰があるぞ。」という内容だ。個人的に「感謝して」の部分は文字

に刻まれていないので拡大解釈だと思うが、ともあれ武士の給料は農民の稼ぎから、公務員の給料また政治資金は国民の税金だからという対照は理解できる。原点回帰は次の、弱い民を虐げると天罰が下るという文だ。国民のために誠実で謙虚に職に臨むことが求められる公務員には共感するものがあるらしい。

戒石銘の写しを今回初めて国会に提出したのであれば二本松藩の教えは全国に共感させうる内容ですばらしいといたい。だが政治家は何人も同じ誤ちを繰り返している。その度、同じような言葉を発すものの不正はなくならない。なんなら江戸中期の戒石銘が刻まれた当初でさえ、二本松藩の武士はこの教えが気に入らず、民をたぶらかし、藩儒学者で二本松藩戒石銘の生みの親とも言える岩井田昨非を失脚させている。戒めはごもつとも、だが実現はいつの時代も不可能なのではないだろうか。気持ちだけでは達成できない戒めを守るために何をするのか、具体的に考えてみたいと思う。

まず税金について。熟知しているだろう国会議員や地方公共団体の長などが当たり前の税金の話を定期的に勉強すれば良いと思う。税金を動かす人達が僕らのような学生が受ける税金の授業を改めて受講することで、眠っている良心を起こすことができるのではないだろうか。

次に国民と同じ目線をもってほしいと思う。自分のお金だったら大事に使うのに、税金で不正をはたらくのは他人のお金と違って

るからではないだろうか。誰でも良いので公務員ではない誰かと視線を合わせる。不正をはたきそうになったら、その人の顔を思い出す。たったそれだけでも不正は減るのではないだろうか。

岩井田昨非が成し遂げたかった藩政改革と綱紀肅正はいつの時代でも課題である。志高く目標をかかげるが、実現が中々難しい。けれども、百五十年以上前に藩をそして国を考え行動に移していた人達がいたことに感銘を受ける。そして今尚、国のトップに送って恥じない教訓を持つ二本松を誇りに思う。僕も過去の偉人に習い、志高く、目標を実現させるために必要なことを考え続けることをやめない精神をきたえていきたい。